執筆者紹介ほか

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00054908

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

執筆者紹介

村戸　弥生　石川工業高等専門学校非常勤講師
第32回卒業・大学院第14回修了・社会環境科学研究科第2回修了

中條　響　第66回卒業

團野　光晴　石川工業高等専門学校教授
第38回卒業・大学院第19回修了

彙報

会員著作紹介

※著作の刊行がございましたら、ご一報ください。

八木真生・早川幸子・中村朱美著『上級・超級日本語学習者のための　考える漢字・語彙　上級編』（二〇一五年四月刊、本体二一八頁、別冊解答四〇頁、ココ出版、二〇〇〇円）

藤田佐和子著『上級・超級日本語学習者のための　考える漢字・語彙　超級編』（二〇一五年四月刊、本体二六六頁、別冊解答二八頁、ココ出版、二四〇〇円）

日本語教育、多文化主義などの専門書、教科書で知られるココ出版から「（上級・超級日本語学習者のための）考える漢字・語彙」と題する教科書シリーズが刊行された。金沢大学留学生センターの漢字クラスの教材をもとにした、著者の方々の長年の教育・研究活動の蓄積の賜物である。日本語能力試験2級（N2）ないし1級（N2）の学習者向けの『上級編』と、さらに高い実力を目指す『超級編』の二編から成り、漢字の運用能力と語彙力の強化を目的とする。シリーズとしての統一性を図る一方、それぞれで独自の編集方針が採られ、レベルの違いに即した個性的な内容になっている。なお、「超級」とは、上級者がさらにその上を目指すという意味であり、出版

に際して「上級」と区分するための名称とのことである。

日本語学習者にとっての漢字は（もちろん、質的な違いこそあれ、母語話者についても言えることだが）、いわゆる読み書きの学習では済まされない。漢字で表記される個々の語を理解し、会話も含めて、それらを実際の場面で使えるようにしなければならない。つまるところ、各語の文法的ふるまいや意味の習得が必須であり、語彙的側面に相当の労力を割くことが求められる。そのため、漢字と語彙を学習上密接に連関させるとともに、両面の違いにも目を配る必要が出てくる。『上級編』で解説されている「安易」を例にとると、少なくとも現代語に関する限り、否定的評価を伴う意味で使う。だから、「安易な方法が見つかってよかったね」は決して褒め言葉にならない。二つの漢字「安」「易」からは導き出せない意味であり、『国語辞典』でもその点の語義説明が十分でないことがある。母語話者は、意味は漢字の字面からわかるとついつい思いがちだが、決してそのようなことはない。この種の意味情報は、学習者にとっては決定的に重要である。本教科書も、漢字学習と関係させつつ、いかに効果的に語彙力を身に付けるかに多くの工夫を凝らす。類義語間の構文、意味、コロケーション（ある語が、文内でどのような他の語、要素といっしょに使われるかの関係）の違いなどを提示しながら、語彙の習得が着実に行えるよう編集されている。

上級およびそれ以上の学習者が、漢字の運用能力、語彙力をさらに高めようとすると、独習の占める割合が大きくなる。一方、効率よく学ぶためには体系的な学習が欠かせない。必要となるのはそれを導いてくれる確かな教材であるが、出版状況から見て従来そこが手薄であった。本シリーズはそうした学習者の需要にまさしく応える意味で画期的な教科書として登場した。

また、題名に「考える漢字・語彙」とあるように、能動的な学習を促す点も大きな特色である。学習者中心の授業活動用の教材を数多く盛り込み、アクティブラーニングが喧しく言われる以前よりその手法を積極的に独自に開発してきた授業経験が活かされている。また、本教科書では学習者が独習用に使うことも想定し、『上級編』『超級編』のそれぞれにウェッブ上に「知恵袋」という教材を別途提供する。出版社のサイトを通じて入手でき、海外からも容易にアクセス可能で、教師用としても使用される。

二冊を通して重要漢字四百二十四字を網羅し、『上級編』『超級編』の各々が半分ずつ受け持つ。いずれも十二課から成り、都合二十四の各課にほぼ等分に学習字数（十六から十九字ずつ）を割り当てる。

『上級編』の各課は漢字の基本学習を行う「覚える」とそれに続く「問題」の二部構成で、さらに「問題」は「1・確認する」「2・考えて使う」「3・発展問題」「4・コロケーション」の四部に分かれる。「問題」では、各漢字の基本学習の確認・復習の後、さらに語彙学習に結びつくよう解説と問題を配置する。たとえば、第二課では漢字「援」を学習した後、「4・コロケーション」で「救援」「支援」「援助」のコロケーションの違いに注目し、その使い分けについて学ぶようになっている。このようなところからも、漢字学習と合わせた、効果的な語彙習得が重視されていることがうかがえる。同様に、第五課では、「極端」「究極」「極度」などの違いが取り上げられ、コロケーションと、意味、使い方の違いを関連づけて示す。

『超級編』も漢字の基本学習の部分は『上級編』と共通するが、それに続く問題の構成が大きく異なっている。こちらは超級の名に相応しく、説明も詳しくなり、語彙の学習もそれだけ深い理解が目指されている。同時に、学習者自らが考え、学ぶという点がより前面に出されているところも特徴的である。とくに目を引くのが「生教材」で、一定の文脈の中で実際に語がどのように使われるのかを学習者に考えさせる。狂言、小説、随筆、旅行ガイド、漫画といった様々なテクストが用意され、語彙力を文章の読解と関連づける。その他、各課に「おまけ」が設けられており、印刷字体と手書き字体の違いなど、漢字を書くときの注意点にも触れ、さらに有益な情報を学習者に提供する。

『上級編』の著者のうち中村朱美氏は金沢星陵大学教授。また、『超級編』の著者である藤田佐和子氏は金沢大学国際機構留学生センター非常勤講師、富山大学国際交流センター非常勤講師。（高山知明）

金永昊訳注・丸井貴史解説

『江戸時代に開かれた中国白話小説の世界――英草紙――』

（二〇一六年一一月刊、JNC、二七五頁、一六〇〇〇ウォン）

右の著名等は日本語訳をあげたが、原題をハングルで示せば、역주 김영호·해설 마루이 다카후미 丸井貴史『숭실대학교 동아시아 언어문화연구소 문화총서 7 일본 에도시대에 펼쳐진 중국 백화소설의 세계 ――하나부사소시英草紙――』（제이앤씨）となる。都賀庭鐘『英草紙』の初の韓国語訳である。底本は、中村幸彦訳注の小学館新編日本古典文学全集。注釈もこれを踏襲するものが多いが、平明な表現に改めるなど工夫が施されている。訳と注釈を担当した金永昊氏は浅井了意および近世前期の怪談文芸を専門とし、『諸国百物語』の韓国語訳も行っている。氏の巻頭言に拠れば、本学の博士課程在籍時に木越治先生の『英草紙』研究会に参加し、この小説が東アジアの文学史においても重要なものであると考え、ひそかに翻訳の志を抱いたという。その研究会からおよそ十年の月日を経て、氏は韓国語訳を完成させた。注には、当時の研究会のレジュメも反映されているとのこと。学生時代からの宿志を達成した金氏の偉業にまずは敬意を表したい。東アジア文学史上の重要性というのは、金氏が巻頭言で述べるように、中国白話小説の受容の問題である。『英草紙』は中国白話小説の翻案として成立し、それが「読本」という新しい文芸様式を生み出したことは周知の事実だが、このことを東アジア文学の展開として考えた研究はない。従来、韓半島における白話小説受容と、日本における白話小説受容は別々に研究されており、その関連性が注目されることはなかった。それがこの翻訳によって、相互の関連性や比較にはじめて焦点があたることになった。金永昊氏といえば、「アジア漢字文化圏の中の『伽婢子』――「遊女宮木野」の翻案の特質を中心に――」（『人間社会環境研究』第一八号、二〇〇九年九月）において、中国の『剪灯新話』の翻案として、日本の『伽婢子』、朝鮮の『金鰲新話』、ベトナムの『伝奇漫録』を比較して、その特徴を論じてみせた。当時その大きな視野に驚かされたことをよく覚えている。本書も金氏のスケールの大きな問題意識

の上に成立している。もちろん、翻訳のみでは、原話と比較しての作品の特徴や、研究の動向などを十全に伝えられない。そこで重要になってくるのが、丸井貫史氏による解説である（丸井氏の日本語の解説を金氏が翻訳して掲載）。丸井氏は、庭鐘および白話小説の享受を専門とする研究者で、『英草紙』についても、「三言ならびに『今古奇観』の諸本と『英草紙』」（『近世文藝』第九七号、二〇一三年一月）の中で、白話小説の諸本を精査し、庭鐘が依拠したテキストを明らかにしている。本書の解説もその成果や先行研究を的確にまとめ、原話となった白話小説との丁寧な比較考察を行っている。一九九五年の小学館新編日本古典全集以来、『英草紙』の解説はなく、本書の丸井氏の解説が最新かつもっともすぐれた解説といって差し支えない。庭鐘には伝記に不明の点も多く、また『繁野話』『莠句冊』等の作品の難解さから、謎めいた作家という印象があったが、本書の解説では、丁寧に伝記的事項を逐い、また作品内の作者のまなざしに言及することで、生身の人間としての庭鐘像を打ち出そうとしている。こうした傾向は氏の直近の論文「庭鐘作品の男と女――白話小説との比較を通して――」（『国語と国文学』第九四巻第一一号、二〇一七年一一月）にも共通している。丸井氏の今後の研究によって庭鐘像が刷新される日も近い。なお、この解説については、『上方文藝研究』第一四号（二〇一七年六月）に掲載されているので、日本語で読むことが可能である。以上、金氏の野心的な企画と、丸井氏の意欲的な解説により、非常にすぐれた翻訳書になっている。日韓におけるこの分野の研究に大いに寄与するものであろう。今後の研究の進展と活発な交流を期待したい。

（紅林健志）

岩津航・佐藤文彦・杉山欣也・鈴木暁世・髙田茂樹・西村聡著
『文学海を渡る〈越境と変容〉の新展開』
（二〇一六年一二月刊、二七七頁、三弥井書店、三二〇〇円）

金沢大学の文学研究者六人が、それぞれの研究の関心に引きつけて、「読みかえと書きかえの文学史」を地球規模に広げて考察した論集。読みかえと書きかえに焦点をあてることで、文学創造の複雑な現実と、文学テクストを読むことの果てしない可能性を浮き彫りにすることを狙いとし、文学テクストが、模倣や反撥を通じて新しい意味を獲得していく過程を実証的に検証する。国境を越えて、方法や思想が多方向に伝播し、変容していく全体を捉えようという企図には、グローバル時代の感性が反映されている。六つの論考の研究対象や研究方法における境界の越え方はそれぞれ異なり多様である。

第一部「象徴の発見と再生」では、時代と言語の隔たりを越えて伝えられたテクストや象徴の解釈がどのように変容したかに焦点が置かれる。謡曲と漢籍における「芭蕉」という植物の象徴性の波及が辿ることが、能特有の文章がどのように生成されたかを考えるきっかけになる。大正末期日本のアイルランド農民劇の受容の調査から、都会知識人たちと地方劇団の意図のずれが発見される。ユダヤ系フランス語詩人フォンダーヌによるユリシーズ神話の再解釈における伝統性と独創性の検討は、古代から様々な形で語り継がれる神話と個別な詩との関係を再確認させられる。

第二部「言語の境界に立つ虚構」では、言語境界に立つ意識をもった作家の作品を中心に論じられる。三島由紀夫『アポロの杯』での「見て書かなかった」ことを実地で知ることで、リオ・デ・ジャネイロを新たなるアイデンティティ確立の場とした三島の意図が浮かび上がる。水村美苗『本格小説』とイギリス近代小説『嵐が丘』の比較から、物語全体を貫き自らの意思で掌握し制御しようとする「語りそれ自体としてのリアリティ」という水村の新しさが見出される。言語の境界で移民の視点や移動の感覚を得たという共通点を持つシャミッソーと多和田葉子の接続により、ドイツ語と日本語の差異や接触によって生じる言語感覚に対し常に意識的な多和田の特質が示される。

本書を通して読者は、論じられた個々の対象に関する知識を深められると共に、他言語他文化への越境により見えてくる新たな問題意識の必要性と、それを導く比較文学研究の有効性を知ることができるだろう。加えて、物語、神話、詩、演劇、小説、映画、といった表現形式の越境の問題も意識させられると思う。（糟谷浩平）

西村聡編

「言語文化の越境、接触による変容と普遍性に関する比較研究」

（二〇一七年一月刊、一三八頁、金沢大学人間社会学域人文学類）

異なる文化が接触する場面では様々な興味深い現象が生じる。文学であれば、翻訳のされ方、翻訳本の受容のされ方、時代の推移による古典作品の受容の変化などがある。言語であれば方言と方言の接触、外国語と母国語の接触などがある。作家であれば、他国の文学や芸術に触れることで作品に何かしらの影響を受けることもある。言語研究・文学研究をするうえで、異文化との接触、そして異文化理解は欠かせない課題となっているのである。そしてそれはグローバル化が叫ばれる現代においてますます顕著になっている。

本書は「言語文化の越境、接触による変容と普遍性に関する比較研究」という課題に取り組む教員グループ（人文学類担当・歴史言語文化系所属）が、新たな研究成果や研究経過・研究計画の一端を国内外に発信・還元することを目指し、作成された。

言語活動は、口頭表現・書記表現ともに、文化形成の根幹にある。それだけに、異なる言語と接触することは、最も深いレベルでの異文化理解を促すものである。書記表現によって創り出された古典文学作品は、それが属する文化を凝縮したものである一方、異なる時代や文化圏で受容されるときには、解釈が変容することがある。口頭表現も言語接触によって変容する。しかし、すべてが変容するわけではなく、そこに地域性、時代性を超えた普遍性を見いだすこともできる。異文化の越境、接触により、何が変化し、何が継承されるのか。本書は歴史的・社会的に限定された文化の特殊性と、越境と接触によって変容しつつもなお残る文化の普遍性との関係を探求するものである。日本語・日本文学について追究するだけでなく、英、米、中国、フランス、ドイツなど異文化の観点からも広く言語・文学について考えることのできる一冊。

その内容を目次に従って記せば、以下の通りである。

「ジェイン・エア」から『広い藻の海』へ―植民地からの応答　和泉　邦子
中国における「方言」―境界と越境―　岩田　礼
越境と変身―ロマン・ガリが問いかけるもの　岩津　航
「梁山泊と祝英台」物語の文化空間　上田　望
パロディ演劇からシャミッソー賞まで
―言語文化の越境と接触に関する私の研究履歴―　佐藤　文彦
日本文学の汽水域にて　杉山　欣也
「あいるらんど」とはどこのこと?
―変奏される丸山薫「汽車に乗つて」―　鈴木　暁世
人生夢芝居―転換期を生きる人々―　高田　茂樹
他方言と接することによる母語認識の変容　髙山　知明
〈卒都婆小町〉の未来―壮衰の因果を超えて―　西村　聡
輪島市海士町のことばと海士町町民のルーツ　新田　哲夫
（関口　航）

卒業論文・修士論文一覧

卒業論文　二〇一七年度提出分

芦崎　文音　鈴木三重吉『千鳥』論―色彩とモチーフの共鳴
大道　奈保　芥川龍之介「六の宮の姫君」研究
越智ちづる　柳美里『家族シネマ』
―受身から行動へ変化する「私」―
糟谷　浩平　中上健次「十九歳の地図」論
―思いだせない語り手「ぼく」―
加藤　彩香　六条院の四季研究
―『源氏物語』〈初音〉〈胡蝶〉〈蛍〉〈常夏〉〈篝火〉〈野分〉〈行幸〉の七帖より考察―
加藤　悠　謡曲「小鍛治」―シテ研究―
北　千聖　泉鏡花『草迷宮』研究
北川　梨絵　『アカシヤの大連』考
―前後作『朝の悲しみ』『フルートとオーボエ』を含めて―
岸本　実里　吉原幸子「オンディーヌ」研究
―同化する「わたし」が語る「あなた」―
熊崎　菜穂　尾崎翠「こほろぎ嬢」研究
―「読者」から「表現者」となりゆく女主人公―
笹原穂菜実　深沢七郎『楢山節考』における辰平の特異性
関口　航　志賀直哉『范の犯罪』論　―共感の理由―
高木　祐樹　「デンドロカカリヤ」論
寺居　由貴　大庭みな子『栂の夢』論
―「家庭」という関係の破綻―
仁科　恭子　明治期文学作品における「どうも」の用法
―感謝・謝罪・ねぎらい等の表現とともに使用される用法を中心に―
長谷川千秩　中古・中世におけるカ系・ア系指示詞について
森井　千鶴　泉鏡花「化鳥」における語り手像
山崎　修平　坂口安吾「青鬼の褌を洗う女」論
山田　麻奈　江國香織「流しのしたの骨」研究
吉岡　一耀　『伊勢物語』研究　―人物呼称に関する一考察―
渡辺加奈子　岡本かの子「母子叙情」論　―作中短歌を中心に―

修士論文　二〇一七年度提出分

クリスティアン・エセキエル・ジョルダーノ
天草版『ドチリナ・キリシタン』と一六〇二年刊『Doctrina Christam』との比較　―「をもって」／'por'を中心に―
初田千乃子　謡曲『隅田川』における利生を考える
―シテの心情表現の読みを通して―

編集後記

○『金沢大学国語国文』第四十三号をお届けします。今号は、論文三本を掲載しました。皆様どうか奮って論文を御投稿ください。「会員著作紹介」欄では、会員の皆様に御執筆頂き、書評四本を掲載しました。御執筆頂きました皆様に感謝申し上げます。御著書の刊行がございましたら、どうか事務局までご一報ください。

○平成二十九年度　研究発表会・講演を九月三十日に金沢大学サテライトプラザにて開催しました。博士前期課程二年の周佳麗氏による研究発表の後、杉山欣也教授に「ブラジル日系文学の現在」と題して、サバティカルで滞在されたブラジルでの研究成果を御講演いただきました。同日、金沢大学国語国文学会・東アジア古典演劇研究会共催の公開講演会「芸談の言葉―蹴鞠伝書と能楽論―」を開催し、村戸弥生氏に「『中撰実又記』と能楽」、佐々木香織氏に「「芸談」である意味」と題して御講演頂きました。夕刻から、「ここちや」にて同窓会が開催されました。時間が経つにつれて、和気藹々とした雰囲気のなかで近況を報告し合いました。皆様、ぜひご参加下さい。

（鈴木記）

『金沢大学国語国文』投稿規程

○金沢大学国語国文学会の会員は誰でも機関誌『金沢大学国語国文』に投稿することができます。

○日本文学・日本語学に関する研究であれば、時代・分野を問いません。

○枚数は四百字詰め原稿用紙換算四十枚以内とします。ただし、特別号については、別に定める場合があります。

○投稿原稿の採否は編集委員会で決定します。

○編集委員は、毎年第一回目の理事会で選出いたします。

○投稿論文の送り先は左記宛にお願いします。

〒920―1192
金沢市角間町　金沢大学人間社会一号館
日本語学日本文学研究室内
金沢大学国語国文学会事務局

金沢大学国語国文学会会則

第一条　本会は、金沢大学国語国文学会と称する。

第二条　本会は、会員相互の国語国文学に関する研究の促進と連絡をはかることを目的とする。

第三条　本会は、前条の目的を達するために左の事業を行う。
一、研究発表会・講演会の開催
二、機関誌の発行
三、その他必要と認められるもの

第四条　一、本会の会員は、金沢大学文学部日本語学日本文学専攻・国語国文学専攻および金沢大学法文学部国語国文学専攻ならびに金沢大学大学院人間社会環境研究科（日本語学日本文学関係）および文学研究科文学専攻（日本語学日本文学）・国文学専攻の卒業生・修了生、教員、またはこれに準ずるものとする。
二、元教員・元教官は特別会員とする。

第五条　本会には左の役員を置く。

理　事	若干名
代表理事	一名
会　計	一名
会計監査	一名

第六条　一、理事は会員の互選による。但し教官は理事とする。
二、代表理事および会計・会計監査は理事の互選による。
三、役員の任期は一年とする。但し再任は妨げない。

第七条　理事会は本会運営の責にあたる。但し必要に応じて編集委員会等の専門委員を選出任命することができる。

第八条　会務を遂行するため、事務局を金沢大学文学部日本語学日本文学研究室に置く。

第九条　本会の経費は、会費その他をもってあてる。

第十条　会員は機関誌・会員名簿の配布を受ける。会員は機関誌・研究発表会において研究を発表することができる。

第十一条　会則の変更その他重要事項の決定は、総会の議を経なければならない。
総会は、年一回これを開く。

付　則

第一条　会費は年額二、〇〇〇円とする。

第二条　本改正会則は平成十二年四月一日から施行する。

金沢大学国語国文　第四十三号
平成三〇年三月二〇日　印刷
平成三〇年三月二〇日　発行
編　集　金沢大学国語国文学会
発　行　金沢市角間町
金沢大学人間社会一号館
金沢大学国語国文学会
印　刷　金沢市御影町十九―一
ヨシダ印刷株式会社